浦賀文化

平成25年（2013年）4月1日

第33号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

虎踊りと浦賀

浦賀奉行所の開設にあたり、伊豆下田より船改めを手伝うために60軒余の廻船問屋が浦賀に移ってきました。虎踊りは、その人たちが故郷を想い伝えたといわれています。

浜町（西浦賀四丁目）に、西叶神社の末社として為朝神社がある。この神社は、江戸時代後期に編集された『新編相模国風土記稿』に「疱瘡神」として記され、祭神は鎮西八郎源為朝という。

源為朝は、保元元年（一一五六）の保元の乱に、父、源頼義とともに平清盛の軍と戦って敗れた。その際に、為朝の強弓を恐れた勝者側によって腕の筋を切られ、伊豆の大島へ流されて悲惨な流人生活の果てに島で没したという。

こうした悲劇の武将の怨念を恐れ、為朝神社は為朝の御霊を祀ったものである。その御霊の力によって、当時、恐れられていた疫病の一つである「疱瘡」の災いを救ってくれる神という信仰が為朝神社に神霊として期待されていたと考えられる。

浜町に伝わる「虎踊り」は、毎年六月、為朝神社の境内に舞台を設けて行われている。この民俗芸能は、享保五年（一七二〇）に奉行所が下田から浦賀に移された時に伝えられたという。奉行所が移されたのは、船の大型化や、下田港の周辺は暗礁があり、波が荒くなると入港が困難になることなどの理由があったようだ。

さて、「虎踊り」の内容に触れてみよう。これは、原作を近松門左衛門の浄瑠璃作品である『国性爺合戦』によっている。

「国性爺」とは、中国の明王朝時代（一三六八～一六四四）の英雄として知られる鄭成功の異名である。鄭成功は明皇帝の姓である「朱」を称することを許され、国姓を賜ったことから、「国姓爺」と呼ばれるようになった。したがって、本来は『国姓爺合戦』と表記すべきだったのかもしれない。

鄭成功は、明王朝が滅んでから、母の祖国である日本に亡命し、新しく興った清王朝に反旗を翻していた。物語の主人公である和藤内は鄭成功をモデルにしたものである。和藤内による虎退治は叶明神の威徳によるものというストーリーは、当時恐れられていた疱瘡に対する脅威の念が、虎になぞらえて語られているものと思われる。

為朝神社の創建は、虎踊りが浦賀に伝えられてから百年ほど経ってからのことであり、それまでは西叶神社で奉納されていたものと思われる。

周囲に竹笹をしつらえた舞台には、歌舞伎役者さながらの隈取をした和藤内が鎮座し、唐子と呼ばれる中国風の装いをした子どもたちが独特な歌に合わせ踊りを舞う。そして大小二頭の虎が、「虎返し」「逆飛び」などといわれるアクロバティックな演技を見せてくれる。夕闇の中での、笛、太鼓、三味線の賑やかさの中にも哀愁を帯びた演奏がさらに、雰囲気を盛り上げている。

元は伊豆の下田から伝えられたものとはいえ、今では浦賀に定着した虎踊りは郷土文化の象徴ともいえる。神奈川県の無形民俗文化財に指定され、地域の伝統文化として保存に努めている。

なお、「虎踊り」は、横須賀市内では野比にも伝承されており、虎が一体で演技されるなど、形式は多少異なるものの、浦賀のものとの類似点が多い。浦賀のものと合わせて「横須賀の虎踊り」として国の無形民俗文化財に指定されている。

昨年の虎踊りの様子

★参考資料
・「横須賀の文化財」横須賀市教育委員会
・「西岸叶神社誌」
・「浦賀奉行所」　高橋恭一著

歴史語らい座・浦賀 三十三

郷土史家 山本 詔一

●問屋料値上げ願い●

文政三（一八二〇）年三月、問屋料の値上げ願いが浦賀奉行所へ提出された。

問屋料もしくは問料とは、浦賀で廻船が「船改め」と呼ばれた検査を受けたときに発生する通関税の一つであり、実際に検査業務をする問屋へ入る手数料のことである。

享保六（一七二一）年二月、浦賀に奉行所が設置され、船番所が置かれて江戸へ上り下りするすべての船は、浦賀へ寄って荷物と乗組員（江戸時代は水主と書いて「かこ」と呼んでいた）の検査を受けること、これを「船改め」といい、どの船にも義務づけられた。

この仕事は民間に委託されていた。委託先は伊豆・下田時代からこの業務に携わり、奉行所の移転とともに下田から浦賀へ越してきた人が六三軒、西浦賀から二二軒、東浦賀はすべて干鰯問屋で二十軒が選ばれて、「廻船問屋」と呼ばれ、東西浦賀と下田で構成されていたので、三方問屋とも呼ばれた。

廻船問屋は自分が検査を担当する船が決まっており、この船の水主の数で「問屋料」をとっていた。船はこの他に大きさに準じて十石で三文の「石銭」を払うので、浦賀港へ入ると二種類の通関税を上り下り分払っていた。

問屋料は最初、水主一人に対して銀一匁（もんめ）八分であったが、元文（一七三六～四十）年間に二匁七分、天明（一七八一～八六）年間に三匁三分と値上がりしていった。この背景には船の大型化と水主の数が比例していないことにあった。

文政三年の値上げの願書にも記されているが、「船改め」の始まった享保期には五千艘の船が入港したが、元文年中ごろには、三千七、八百艘に減少した。また、享保のころの大型船は七、八百石積みぐらいで、水主が十四、五人乗っていたが、天明ごろから千石船が現れ、この船の水主は十二、三人になってしまった。これで江戸への荷物量は変わっていないという。

「現在（文政三年）は、さらに船が大型化し千二、三百石積みの船となっているが、省エネ航行で、水主の数は全く変わらない。こうした状況が続くと問屋が継続できなくなり、奉行所にも迷惑をかけるような事態を招きかねないので、ここは私どもをお救い下さると思って、水主一人の問屋料を五分値上げして頂きたい。」というものであった。

四月に入ると三方問屋の願いは叶えられ、水主一人から三匁八分の問屋料を徴収することが出来るようになった。

この値上げは前もって廻船を持っている人々の賛同を得てなくては出来ないことであったから、奉行所より前に了承してもらったうえでのことであった。

また値上げが認められないと問屋が立ち行かなくなると訴えたが、実はこんなことで潰れるような家には問屋職は与えておらず、皆この他に立派な生業をもっていた。しかし、この部分だけを切り取って計算すると赤字となることからの値上げ申請であった。

さらに裏読みをすると、同じ月に干鰯問屋が高景気から運上金を五両増額したいと届け出て、これが了承されていたことと表裏一体の部分があったかな、とも思われる。

笑話一題

今から数十年前、丸坊主の高校生だった青春時代が懐かしい…。朝五時半に起き、六時半に学校に着いて練習場の清掃をするのが一日の始まりでした。

上級生が来るまでの約一時間が、一年生にとって貴重な練習時間でした。八時半から授業が始まりましたが、眠くて居眠りをする授業が多く、教室で先生に教科書で頭を叩かれ、職員室に呼ばれ、クラブの顧問の先生に大声で叱られました。放課後の練習は、ボール拾いがほとんどで、家に帰るのは夜の九時半頃になり、お正月を除き、毎日その繰り返しでした。

二年生になると、練習時間も増え、試合に勝つことが何よりの励みとなりました。インターハイ、国体等の大会に神奈川県代表として出場しましたが、ベスト四には入れませんでした。これだけ練習し努力しても、全国にはもっと強い人がいることを痛感した高校時代でした。

一、一球一打に精魂を尽くせ
一、限りない研究と無我の練習
一、強きを恐れず弱きを侮らず
一、最悪の条件で最善を尽くせ
一、練習で泣いて試合で笑え
一、規律、礼儀、節制を忘れるな

この「部訓」を今でも時々思い出します。

浦賀コミセン分館 展示室からのお知らせ

展示室にデジタルフォトフレームを設置いたしました。

只今、浦賀の歴史に関する DVD を放映しております。是非、お立ち寄りください。

【開館時間】
午前９時～午後５時
【休館日】
年末年始・定期清掃日